2011 年 2 月 23 日放送

漢方医人列伝 「和田啓十郎」

千葉中央メディカルセンター　和漢診療科部長

社団法人日本東洋医学会　会長　　寺澤　捷年

本日は明治末から大正時代に活躍し、漢方の復興の立役者であった和田啓十郎についてお話します。

和田啓十郎は明治５（1872）年に長野県松代町に生まれ、大正５（1916）年に４５歳の若さで亡くなりました。

実に若くしてお亡くなりになったわけですが、その著作である『医界之鉄椎』の公表によって、湯本求眞がこれに呼応し、大塚敬節へと連なった歴史的事実は、正に日本漢方「中興の祖」と呼ぶにふさわしい人物であると私は考えます。

和田啓十郎先生の伝記は嫡子の和田正系先生によって纏められておりますが、今回はこの伝記を元に、私の憶測を交えて先生の実像に迫ろうと考えます。

先生の人生を見ると、それは順風満帆とはほど遠いものでした。まず先生が漢方に導かれた契機は幼少時の原体験でした。この一事が先生の一生を支配したことは疑う余地がありません。すなわち、親類の難病患者（肝硬変か）が西洋医学の名医によっても何年にも亘って治らず、一人のみすぼらしい漢方医によって見事に治ったという事実です。これは和田啓十郎先生の 6―7 歳の体験です。

此の数年後に先生は呉服商に小僧に出されます。松代藩士の末裔である先生のご家庭が、明治維新によって壊滅的な経済状況に陥ったことが想像されます。

しかし先生は挫けませんでした。向学の念は強く、結果的に松本尋常中学校（現・松本深志高等学校）に入学するに到りました。この在学期間中に禅の修行もしている点に特に注目したいと私は考えます。それは、大宇宙の中の有限な人間存在は大宇宙とそのままに一体化する他に道は無いのです。これを自覚する（悟る）ことは極めて重要であり、古医方の根源的理解に通じる道なのです。

明治２５（1892）年、和田啓十郎は東京医学専門学校・済世学舎に入学。この済世学舎の校長は当時、西洋医学推進の先駆者だった長谷川　泰先生でした。この年に神田の古書店で吉益東洞の『医事或問』を入手し、漢方の医療思想の根源的な奥深さに接したのです。

ここで私は『医事或問』に特に注目したいのです。この書物は設問に吉益東洞が答える形で構成されておりますが、実に、その医療思想の根本に関わる問答集です。たとえば、「天命」という言葉があります。「人事を尽くして天命を待つ」という用語を用いた場合、「天」という無限の存在を「人」という有限な存在は思惟出来ないという明確な思想です。これは佐藤仁斎、荻生徂徠によって明らかにされた大自然と私たち人間存在との関係です。

この『医事或問』を手にし、これに感動できる力量を和田啓十郎はすでに持っていたと言うことです。

そこで、明治２５（1892）年、漢方医・多田民之助に入門しています。この年は奇しくも漢方医学の泰斗・浅田宗伯が逝去された年でした。

その後、和田啓十郎は明治２９（1896）年、台東区御徒町に医院を開業。明治３２（1899）年、故郷に近い更級郡稲里村に移転開業しています。これは全くの推測ですが、日清戦争（1894―1895）の勝利に酔いしれ、「西洋の合理主義こそが日本の近代化にとって誤りのない道である」と信じて疑わなかった当時の時勢において、東京での漢方を主体とした医療活動は困難を極めた結果であったと私は考えています。

帰郷後は古典の研究と文筆に専念し、『上帝医論』（1901 年）、『東西医法比較研究治療法対照』、『自家病自治論』、『治療の漢洋対照』を著しています。この業績は実に驚異的な努力の結果であります。

そして、明治３７（1904）年、突然にこの診療所を閉鎖し、日露戦争に軍医として「志願」、参戦したのです。私はこの全く無謀とも言える和田啓十郎の心意気に深く感動すると共に、その根底に三つの要素があったと確信しています。その第一は、和田啓十郎が信州・松代藩の藩士の末裔であったことです。松代藩は真田幸村で知られる真田藩が信州・上田から移封された土地であります。徳川家と豊臣家のどちらに味方するか、そして歴史の証明するところは一家を二つに分けて領国安堵を探ったのです。江戸・幕藩体制の中での松代藩主の苦衷は察して余りがあります。しかし、藩士達は「武士道」の矜持を忘れることはありませんでした。それが幕末の佐久間象山に象徴的に表出されています。佐久間象山も松代藩士なのです。

その第二は極めて強い愛国心です。そして第三は漢方を主軸とする医師である自分でも

この国難に立ち向かえる者であることを世間にアピールしたい気持ちがあったと推測しています。

さて、『医界之鉄椎』に話を戻しましょう。ここでの和田啓十郎の主張は、要素還元論的に展開されている現代医療（当時）への警告です。これは正に「医療論」そのものです。人間に災厄をもたらす疾病は局所的な問題ではない。確かに戦時のおける貫通銃創のようなものは「純粋外科学」の領域であるが、例えば虫垂炎や蜂窩織炎のようなものは外科的治療よりは生体の防御力を高めてこれを治療しようとする漢方の理念の方が優れているとの主張なのです。それを実地経験から悲痛な叫びとして述べているのです。「万犬の虚吠よりも、一犬の実吠を切望する」と、そのメッセージを発しています。これに「実吠」したのが、湯本求眞その人であったのです。

漢方の統合的な理念を科学的に解明して行くこと。それは科学への屈服では決してありません。人類の本当の幸せを追求する道なのです。

私は 2010 年にこの和田啓十郎の著書『医界之鉄椎』の現代語訳（たにぐち書店）を出版しましたが、わずか百年前の先生の文章を現代語訳するのに苦労しました。それは擬古文であり、また引用が江戸時代の永富独嘯庵であったりするからです。

明治４３（1910）年に発刊されたこの著作に対して様々な反論が寄せられ、この反論をも収録した改訂版が出されたのは大正３（1917）年でした。ここで極めて論理的に反論を展開したのは名古屋の小児科医・平出隆軒氏でした。平出隆軒の提出した疑問・反論は西洋医学を信奉する、要素還元的な立場からのもので、まさに現代にも通用する、パラダイム論争です。

今となって言えることですが、和田啓十郎先生がこのパラダイムの相違を指摘し、その明確な論陣を張れなかったことを残念に思います。

ただ極めて共感出来ることは和田啓十郎が、思弁性を排斥し、科学的根拠によってこの漢方の体系を説明したかったことですが、当時の科学の水準ではこれは不可能なことであったのです。

しかし、その基本的精神はまさに私の主張する和漢診療学の理念そのものであり、私はこの３０数年の研究活動によって、和田啓十郎の無念の一部を晴らせたものと自負しています。たとえば越婢加朮湯の咳嗽反射抑制機序における麻黄の役割を明らかにしたことです。また、麻黄や桂皮にインフルエンザウイルスの増殖抑制作用のあることをその分子生物学的な機序を通して明らかにすることが出来ました。

また瘀血病態の実態も解明できましたが、これらは漢方方剤の持つ多面的な効能の一部を解明したに過ぎません。科学の進歩によって逐次その多面的な機序が分子生物学的に解明されて行くことと信じています。その学問発展の方向性を明確に指摘した点において和田啓十郎は誠の先覚者であったと私は考えるのです。

参考文献　　寺澤捷年、渡辺哲郎：完訳・医界之鉄椎、たにぐち書店、2010 年 6 月 25 日